

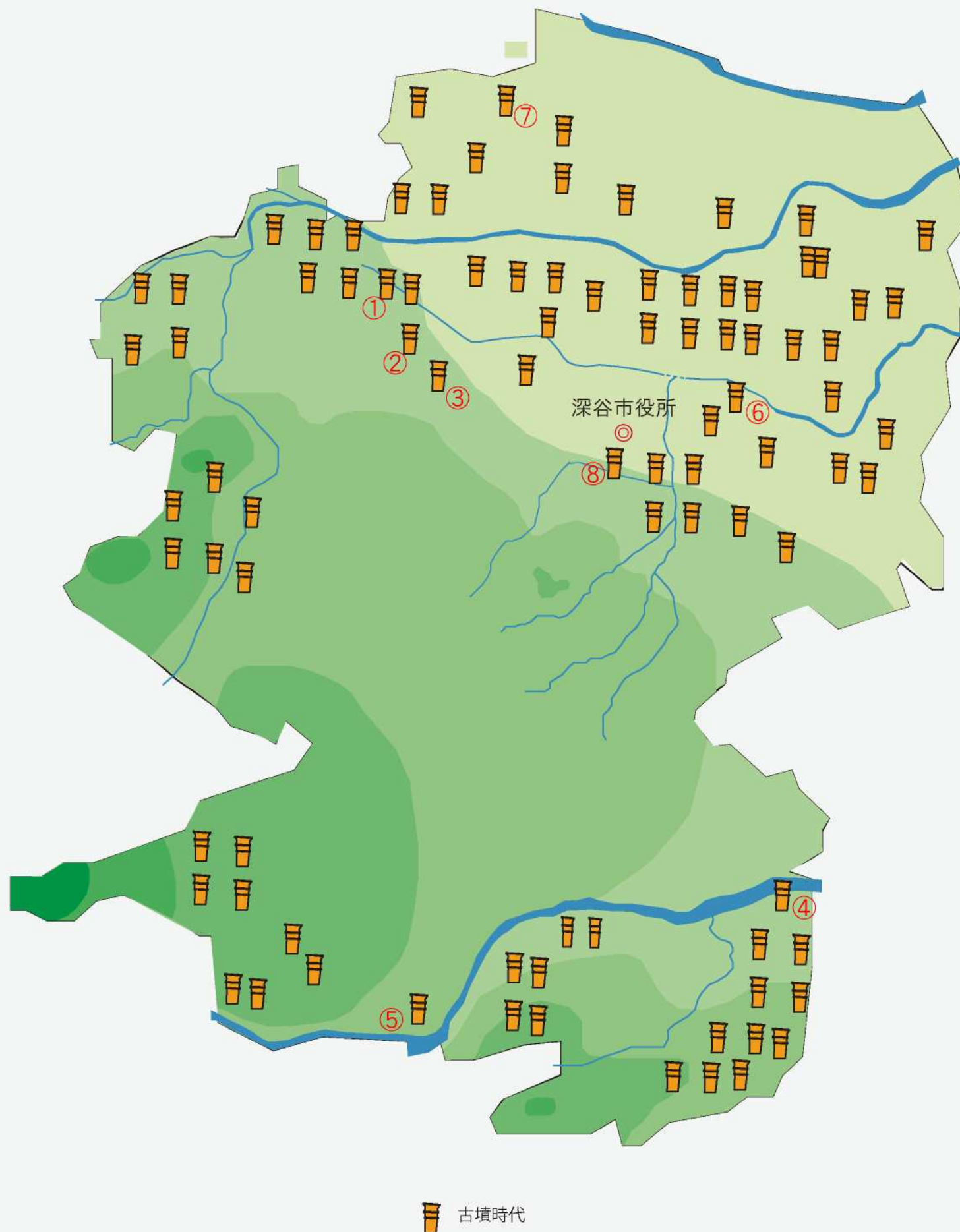
# 古墳時代の遺跡分布

集落は、洪水でも安全な少し高い所に（自然堤防といいます）築かれ、周辺に田畑を作ったものと考えられます。最初のムラとしては、妻沼低地に多く見られ、中期までその傾向が続きます。後期になると、荒川流域にも大規模な集落が営まれるようになります。

古墳は、前方後円墳である寅稻荷古墳①、お手長山古墳（岡）②が築かれます。また、台地の縁辺には、小規模な古墳が密集する古墳群が多数造られました。白山古墳群③、鹿島古墳群④、黒田古墳群⑤、木の本古墳群⑥などが現在も保存されています。

低地の自然堤防にも古墳は築かれ、西浦古墳群（八基）⑦では洪水により古墳4基が埋もれてしまいましたが、発掘の結果たくさんの埴輪が出土しました。

古墳時代になると遺跡の数は増加して、361カ所で集落や古墳が見つかっています。特に後期（紀元500年代）には、市内各所で大規模な集落が営まれ、また古墳群が造られました。



また、古墳に飾り立てる埴輪を焼くための割山埴輪窯跡（上野台）⑧が見つかっています。500年代の中頃に窯が作られ、馬や人物などの埴輪が焼かれ、川などを利用して、木の本古墳群などに運ばれました。



▲出土した埴輪（下手計西浦遺跡）



▲馬型埴輪（下手計西浦遺跡）